

国際研究集会参加報告書

京都大学文学研究科行動文化学専攻社会学専修
博士課程 3 回 山本めゆ

派遣者は、2013年11月14日から15日の2日間にわたってシンガポール国立大学アジア研究所で開催された「Theorising Mobilities in / from Asia」に参加した。集会での報告者は基調講演を含めて計33名、開催校のみならず、オーストラリア、アメリカ、イギリス、中国などからの研究者、院生も集まった。また派遣者も14日の午後「Near White but Not White Enough: Japanese Expatriates in the 20th Century South Africa and their Whiteness」というタイトルの報告を行った。

①成果 派遣者は南アフリカにおけるアジア系移民と移民規制の歴史について社会学的観点から調査を実施してきた。これまでの研究発表は社会学やアフリカ研究の場で行い、アジア研究の一環として発表するのは初めての経験だったが、フロアから想像以上に多くの質問や温かいコメントをいただき、非常に良い経験となった。フロアからの質問やパネル終了後のやりとり等で反応が大きかったのは次の3点である。

a) レイシズム研究の大西洋中心主義批判：アフリカにおいては、レイシズム史がアフリカ人とヨーロッパ人の歴史を中心に描写されてきたため、アジア人の流入が南アフリカの移民規制に与えた影響が看過されてきた。レイシズム研究において、太平洋やインド洋側の人の動きにも着目した研究が必要と主張した。

b) アフリカにおける黄禍論の紹介：19世紀後半から20世紀前半にかけて世界を覆った黄禍論については、北米やヨーロッパ、オーストラリアの例がよく知られているが、アフリカとの関連がほとんど知られていなかった。派遣者の報告は南アフリカの事例を反アジア主義の世界史のなかに置くことを心がけた。

c) 「名誉白人」「Near White」の白人性に関する考察：白人性研究のなかにアジア人の「白さ」という視点を含めることで、「白さ」と文明や帝国に関する議論の深化を目指した。

今回はシンガポールという地の影響もあってか、質疑応答やパネル終了後の会話を通して、英帝国支配下のアジア人労働力の移動や、アパルトヘイト期の南アフリカに関する基礎知識を有した研究者、院生が多いという印象を持った。今回の経験をもとに、今後も自分の研究について、アジア研究やアジア人の国際移動に関心を持つ研究者と共有していくことを積極的に心がけていきたいと考えるようになった。

②研究集会での経験 シンガポール国立大学では移民研究の多くが地理学の研究者によって担われているという点が非常に新鮮だった。そのためか、都市交通やタクシー、航空機の航路の開発と変化、空港の研究なども移動を支える技術の研究も多く、移民研究に関する視野を広げることができた。この視点を派遣者の研究に活かすとすれば、20世紀前半における日本から東南アジア経由で南部アフリカに至る航路とそれに耐えうる客船の開発と、日本人の移動を切り離すことはできない。今後の研究の参考にしていきたい。

以上。